

# 太宰府の文化財

441

## 御笠山で風の神を祀る

太宰府市の北東にある宝満山は、中世以前の記録には「御笠山」と記され、また、山に雲が掛かる姿をもとにしてか「竈門山」とも表記され、複数の名で古代以来史料に度々登場しています。山内の信仰に関する祭祀跡や窟、堂社跡、坊跡などの保存状態が良好であり、現在までの調査・研究の結果、古代から近世に至る遺跡の

変遷が具体的に確認されています。特に古代においては、対外交渉に関する国境での祭祀を担った遺跡として象徴的な存在であり、我が国を代表する山岳信仰の遺跡として重要であることが認められ、平成25(2013)年に国の史跡となり来年で10年を迎えます。

奈良の都平城京の北東にも同名の



宝満山の山頂と上宮殿(東から)

「みかさやま」があります。『続日本紀』には養老元(717)年2月1日の条に、遣唐使が出立に先立ち蓋山(みかさやま)で航海の安全を願ったことが記され、宝龜八(777)年2月6日の条には、遣唐使が前年に風と波が不調で渡海できなかったため天神地祇を春日山(御蓋山)の下で拝した、と記されています。太宰府の宝満山と同様に、奈良の都の北東の山では対外交渉に際して「みかさやま」で祭祀がおこなわれていました。実はこの頃の中国「唐」の都であった長安でも『大唐郊紀録』によれば、立春後の丑の日に国城の東北で「風師」

が、都の北東で祀られたのは特に「風の神」だったようです。宝満山でもかつては風の神が祀られていました。明治初期に編纂された『福岡県地理全誌』には、竈門神社下宮の末社の中に「風神社」が見られ、江戸時代に書かれた『筑前国続風土記』には、山頂下に「風天祠」があり、弘法大師(空海)が風神を祀ったとされています。また、『竈門山旧記』という江戸時代に編纂された史料には、「今に至り毎年六月吉日納風の法を執行、彼の風穴を祭る事空海法師の遺法なり。風穴は秘密所なり。」と記載されています。

(風の神) を祭っていたことが知られていました。唐では日、月、星、山、川、藪、沢などを人格化し、これを「天神地祇」と総称したとされています。

航海技術が発達していなかった古代においては、遣唐使の派遣はすべて風を頼っての航海であり、国外からの情報や文物の請来にとって風の神を祭ることは国家の一大事だったようです。『日本書紀』には神功皇后の笠が風で飛ばされ、その笠が落ちたところが「御笠」である、という物語をのせていますが、ここにも風の話が象徴的に織り込まれており、興味深く読み取れます。

文化財課 山村 信榮

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
☒ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします!



広報だざいふ 2022.2.1 (令和4年)

# 太宰府の文化財

442

## 「岩屋城の歴史」

市街地から四王寺山を見上げると、中腹にぼつりと突き出た平地が見えます。戦国時代の山城岩屋城跡で、豊後（現在の大分県）の戦国大名大友宗麟の家臣高橋鑑種、紹運が在城したことで知られます。特に高橋紹運が北上する薩摩の島津氏を迎え撃った天正14（1586）年の「岩

屋城の戦い」は戦国屈指の激戦として有名で、紹運以下城兵約700人が散った様子は豊臣秀吉に「乱世に咲いた華のようである」と評されたと伝わります。

岩屋城は江戸時代の軍記や地誌の影響か、高橋鑑種が築城したとか、宝満城の支城だったと理解されています。

すが、同時代史料を確認すると文明10（1478）年に周防・長門（現在の山口県）の戦国大名大内氏の家臣相良正任が記した「正任記」にその名が見え、御笠郡支配の拠点だったと考えられます。当時、大内氏は筑前国支配を進めており、博多から筑紫平野まで見渡せる岩屋城は拠点として最適な場所でした。

また、宝満山山頂に位置する宝満城は永禄7（1564）年頃から史料上で確認でき、太宰府地域では岩屋城がもともと利用されており、後に宝満城が築かれ本格的な拠点とな

り、岩屋城は支城として位置づけられるようになったと考えられます。大内氏時代の天文4（1535）年には、武家故実の伝授を求めて平戸松浦氏の家臣籠手田定経が岩屋城の飯田興秀を訪ねており、単なる軍事拠点ではなく、武士同士の文化的交流もみられる場所でした。

さて、現在の岩屋城は平地となっている本丸、その下に二の丸・三の丸と続きますが、周辺も中世山城遺構が残されています。四王寺山山頂付近にある馬責は、古代山城大野城の土塁を利用した作りになり、付近には堀切も確認できます。岩屋城は大野城の一部を巧みに取り込んで作られた城郭だったと考えられます。

岩屋城は「岩屋城の戦い」の後、豊臣秀吉が九州を平定したことで廃城となりその役目を終えます。本丸跡は太宰府市内を一望できるだけでなく、晴れた日は耳納連山まで見渡せる絶好のスポットです。大内・大友時代の歴代の岩屋城主も見たであろう雄大な景色を眺めてみてはいかがでしょうか。



岩屋城本丸跡



岩屋城本丸跡からの景色



筑前三笠郡岩谷城図(個人蔵)

文化財課 木村 純也

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします！



# 太宰府の文化財

(443)

## 祝 姉妹都市承継締結10周年 百済の都 扶餘

太宰府市の姉妹都市である、扶餘郡は、大韓民国の中央部西側の忠清南道にあり、古代朝鮮三国の一つ、百済の都が置かれた街として知られています。

百済は、古代日本(当時は倭)と交流があった国です。『日本書紀』によれば、儒教や漢字は百済を介して伝えられ、医・易・暦の博士、僧や造仏



扶餘市街と定林寺(南から。奥は扶蘇山城)



扶餘羅城(南から)

工人、造寺工人などが来日しました。百済中興の祖として知られ中国南朝と活発に交流した武寧王は、佐賀県唐津市加唐島で生まれたと伝えられ、その子・聖明王は日本に仏教を伝えたことで有名です。

この聖明王が西暦538年、旧都・熊津(現在の公州市)から遷都したのが扶餘です。当時は泗泚といい、百済

史上、本格的に整備された最初で最後の都でした。

地形をみると、北と東には低丘陵があり、北東を上流とする錦江が都を守るように、北から西辺そして南辺に沿って流れています。海からずいぶん離れていますが、話をうかがうと汽水域の豊かな川だそうです。都の中枢は、この錦江ほとりに聳える北辺の扶蘇山(標高94m)で、山上に扶蘇山城が置かれ、南麓に王宮があったようです。都の東側は、丘陵を利用して土塁と石垣からなる城壁(羅城)が築かれています。

仏教が盛んだったことを示すように、中国南朝の技術者が建てたとされる定林寺址、日本の仏教寺院の源流を考える上で重要な王興寺址など寺院跡が点在しています。このほか7世紀中頃に作られた宮南池などもあり、風光明媚な観光地となっています。

こうした百済文化をつたえる扶餘は、他の2地域とともに「百済歴史遺跡地区」として、2015年に世界文化遺産に登録されました。

さて、太宰府との関わりですが、西暦589年に隋が、618年に唐が中国を統一すると、朝鮮半島北部の高句麗国への遠征が相次いで行われ、この影響で朝鮮半島は動乱の時

代を迎えます。660年、新羅国と結んだ唐が百済の都・泗泚を攻めると、わずか10日ほどで陥落し、百済国は滅びたため、百済の遺臣たちは国を復興すべく、当時日本にいた王子を呼び戻し、そして日本に救援を求めました。時の斉明天皇はこれに応じて自ら筑紫に下りますが、急に亡くなり、子の中大兄皇子(後の天智天皇)が兵を派遣しました。そして日本は663年、朝鮮半島西岸の白村江で唐に大敗したのです。こののち日本は百済から多くの遺民を受け入れるとともに、唐や新羅の襲来に備えて664年に水城を、665年には亡命した百済貴族を派遣して大野城・基肆城を築きました。大野城と扶蘇山城、水城と扶餘羅城が似ていると以前から指摘されていましたが、土木技術なども共通することが判明し、注目されています。

このほか、筑紫で亡くなった斉明天皇の供養のため、天智天皇が発願した観世音寺には、金銅製の百済仏が置かれていたという記録もあります。歴史史料や史跡から、太宰府と扶餘との、歴史的に深いつながりを知ることが出来ます。

文化財課

井上信正

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
☒ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします!



広報がざいふ 2022.4.1 (令和4年)

# 太宰府の文化財

444

## 特別史跡水城跡

### ―土塁断面ひろばと中央土塁―

国指定の特別史跡水城跡は、山と山との平野を塞ぐように全長1.2 km、高さ10 mの土塁と、土塁の両側に外濠60 m、内濠50 mを構築した巨大な土木構造物です。今回は福岡県教育委員会により史跡整備された土塁断面ひろば（以下、断面ひろば）と、その背後に位置する中央土塁について

紹介します。断面ひろばはJR水城駅東側の道路沿いにあります。断面ひろばの史跡整備は、平成25年〜平成29年度の5カ年にわたりました。整備に先立ち、水城跡土塁断面の調査を行い、その調査成果をもとに史跡整備をすすめられました。整備方針としては、まず土塁そのもの

の保存を第一とし、その上で土塁の構造と築造技術を市民へ伝えることを目的としています。発掘調査で露出した土塁の断面を新たに1〜1.5 mの盛土で覆い、保全されています。盛土で隠れてしまった土塁断面の情報を伝えるために、立体陶板（高さ2.6 m、幅1.8 m）を現地に設置し、実際の土塁断面の土層の色合いや表面の手触りを表現しています。断面ひろばの背後には中央土塁と呼ばれている水城跡の土塁が続いています。近年、低木などが茂って土塁の高まりが見えづらく、また樹木が

成長しすぎて土塁や散策する人にとって危険な状態が続いていました。そこで、令和3年度太宰府関連史跡整備事業として中央土塁の樹木整理工事を行いました（ただし民間所有地を除く）。この工事では史跡としての本質的価値である土塁を守るため、クスノキ等の巨木・高木を中心に伐採・剪定を行い、併せて木々が密集して暗い森となっていた木々の密度を下げ、土塁頂部のラインを見えやすくするなど、森の中を明るくし、見通し易いように工夫しました。また前述の断面ひろばが土塁の高まりと一体的に見えるように、断面ひろば周辺の樹木を整理しました。

水城跡は都市圏の貴重な緑地帯でもあります。緑地を維持しつつ史跡を保全し、市民の皆さんに親しんでもらえるような水城跡を目指したいと思います。



土塁断面ひろば



水城跡中央土塁



位置図

文化財課 高橋学

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします！



# 太宰府の文化財

445

## 祝 奈良市友好都市提携20周年 奈良時代の太宰府

奈良時代を迎える直前、遣唐使として派遣された粟田真人らにより、唐の文物や文化、政治など先進の情

報が国内にもたらされました。そして、和銅元(708)年に唐の都長安に倣った本格的な都城となる平城京への遷都の詔が発せられます。遷都には、さらに2年を要し和銅3(710)年に現在の奈良市・大和郡山市

に位置する平城京へ遷都され、国際色豊かな奈良時代の幕が開けました。

平城京は、幅73mの朱雀大路(長安の約2分の1)を中心に碁盤の目の街並み(条坊制)が作られ、北端中央に天皇の居所(内裏)や国の政治、儀式を執り行う大極殿などの施設を持つ平城宮が配置され、東大寺など多

くの寺院も建立されました。この平城京の造営に大きな影響を与えた粟田真人は、平城京への遷都の詔が発せられた和銅元(708)年に大宰帥に任命され、新たな大宰府の造営に携わり、平城京と同様の碁盤の目の街並みを持つ本格的な都城(大宰府条坊)となった大宰府が生まれました。

こうして造営された大宰府の街並みは、政治の中心となる大宰府政庁や役所街を北側の中央に配置し、そこから南に伸びる幅36mの朱雀大路(平城京の約2分の1)が敷設され、朱雀大路を中心に街並みが整備され

ていきました。この街並みの中には戒壇院が置かれた観世音寺や般若寺などの寺院が建立されたほか、ほぼ中央に外国使節を迎える迎賓館である客館が整備され、地方最大の官衙となります。そして、大宰府の長官である帥をはじめとした多くの役人が奈良から大宰府に赴任し、平城京で花開いた奈良の文化を大宰府へ伝え、「大君の遠の朝廷」(『万葉集』)や「天下之一都会」(『続日本紀』)と記されるほど華やかな街となりました。

奈良時代の太宰府の街のようすは、平城京に比べ規模は小さいもののよく似た街並みの中を、奈良から赴任した多くの役人が往来し、奈良から伝えられた文化に満ち溢れていたのではないのでしょうか。言わば小さな平城京で、奈良そのものだったことでしょう。

文化財課

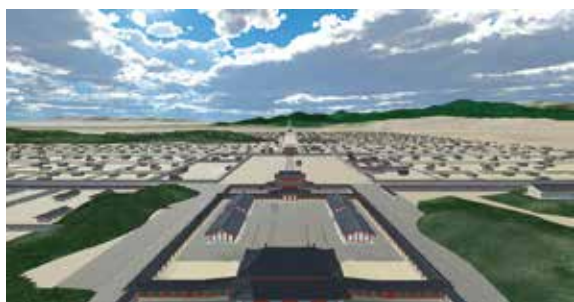
沖田 正大



平城京復元模型中央部  
(奈良市役所蔵)



復元された平城京の大極殿  
(画像提供・奈良市役所)



大宰府条坊復元画像(政庁北側からの俯瞰図)



しまろくん  
©奈良市観光協会

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします!



広報だざいふ 2022.6.1 (令和4年)

38

# 太宰府の文化財

446

## 装飾が施された土器 (川添遺跡第3次調査 国分三丁目地内)

発掘調査では、過去の生活の跡からたくさん出土します。その多くは似たり寄ったりのもので多いのですが、稀に少し変わった装飾をもつ土器が見つかることがあります。そんな変わった土器が、昨年8月から12月にかけて行行った川添遺跡

第3次調査で見つかりました。今回はこの土器について紹介します。今回見つかった土器は須恵器という硬い焼き物でハソウ(甗)という器種です。ハソウは土器の中央に穴(注口)が開いており、ここから筒状の道具を差し込み、土器の中に入れられた液体を注いだものと考えられています

す。破片からなぜわかるかと言うと、この土器を観察すると割れた断面の一部に丸く削られた部分が見えます。割れる前から手が加えられたもので、この痕跡から注口であることがわかります。この特徴と土器の曲がり具合や傾きからハソウであることがわかるのです。

井町)の塚堂遺跡で出土していることがわかりました。今のところ類例はこの1点のみのため、九州ではかなり珍しい土器であることが言えます。こちらは完形品で土器の形や文様の配置がよくわかります。川添遺跡3次調査出土の土器と比べて、竹管文の数や大きさは異なりますが、よく似た文様の配置になっています。

一つ、左上にも欠けていますが、同じ文様があることがわかります。直径およそ9mmの輪が、2mmほど押し込められています。これは竹管文という文様で、その名の通り竹のような管状の道具を押し当ててできるものです。この文様はハソウではあまり見かけられません。

この竹管文を施したハソウと同じ例はあるのか探してみると、福岡県うきは市(旧浮羽郡吉

塚堂遺跡出土の土器は住居跡から見つかっており、時代については5世紀代に製作されたものと考えられています。川添遺跡第3次調査で見つかった土器については詳細な時期を特定することは難しいですが、その形から塚堂遺跡よりは年代が下ると考えられます。類例が少ないことから、当ても貴重な土器であったかも知れません。



川添遺跡第3次調査出土土器(本市出土)



塚堂遺跡出土土器(うきは市出土)

このように、よく見る土器でも少し変わった土器や珍しい土器が発掘調査では見つかることがあります。そのたびに新たな発見・驚きがあります。

文化財課 中村 茂央

編集/太宰府市総務部経営企画課: 7818-0198  
092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします!



広報だざいふ 2022.7.1 (令和4年)

# 太宰府の文化財

447

## 文化財保護法に定められた計画として認定

### ―太宰府市文化財保存活用地域計画―

令和4年7月22日、本市が作成した「太宰府市文化財保存活用地域計画」が文化庁に認定されました。

これまで、平成28年に「明日の日本を支える観光ビジョン」構想会議（議長：内閣総理大臣）で文化財の一体的活用に向けた提言がなされ、それを受けて平成30年6月に文化財保護法（以下、「保護法」）が改正されました。この改正により、文化財の保存・活用に関して市町村が目指す将来的なビジョンや具体的な事業等の実践計画を定める「文化財保存活用地域計画」（以下、「地域計画」）が保護法に明記されました。

この地域計画の特徴は、(1)これまで保護法で対象とする文化財を「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」「伝統的建築群」の6類型を挙げていましたが、

これらに含まれない未指定の文化財（文化遺産）まで視野を広げたこと。

(2)「文化審議会文化財分科会企画調査会」の提言に基づき、「社会総がかかりで文化財の継承に取り組む」と位置付けたこと。そして(3)実践計画を付記することとしたことです。

こうした動きを受けて、本市ではこれまで数年間をかけて地域計画の作成を進めてきました。このたび文化庁に認定されたことを受け、本市では今後、この地域計画を文化財マスタープランおよび実践計画として、継続的な文化財の保存・活用に取り組んでいきます。

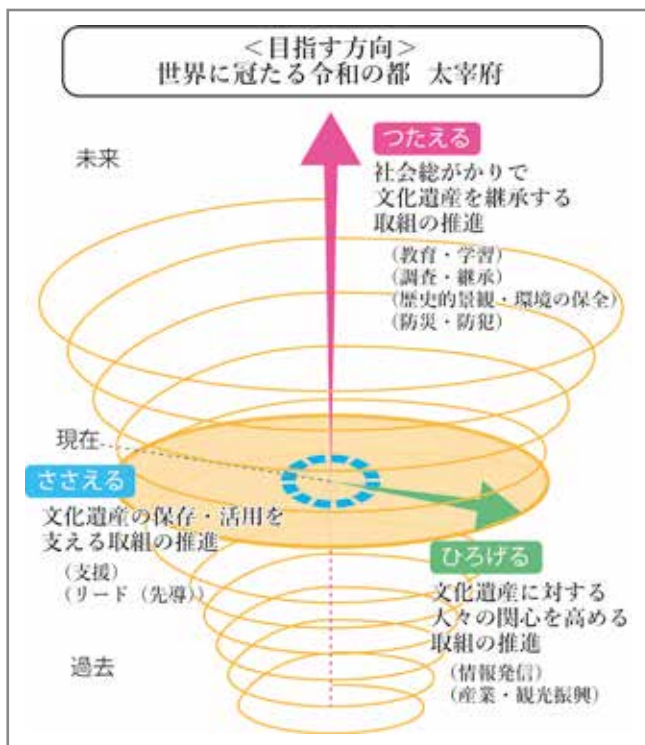
本市の地域計画では、「太宰府市歴史文化基本構想」（平成23年）以来の基本姿勢としてきた官民連携による文化遺産の保護育成をさらに進めることを再確認し、①将来に文化遺産

を「つたえる」②文化遺産への関心を「ひろげる」③文化遺産の保存活用を「ささえる」という3つの方針を掲げています。

そして、文化遺産を未来へ継承するために直近の10年間で重点的かつ戦略的に行う取り組みとして、(1)特別史跡大宰府跡をはじめとする「大宰府関連史跡群の保存・活用」(2)既に取り組んでいる「太宰府天満宮と門前の保存・活用」(3)ボトムアップ型として取り組んでいる「太宰府市

民遺産の育成」(4)大宰府構想を体現する取り組みである「日本遺産の展開」を挙げています。さらに「目指す方向」を「世界に冠たる令和の都 太宰府」としました。文化遺産の保護育成を官民連携で進めることで、100年後を目指し、日本のみならず世界でも先駆的な取り組みとしていくという意味が込められています。

文化財課 中島 恒次郎



「太宰府市文化財保存活用地域計画」より

※1: 未来の市民へ継承したいと思うモノを「文化遺産」とし、文化財を包括する考えとしています。



# 太宰府の文化財

448

## ―国史跡指定100年― 筑前国分寺跡

現在世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症と同様に、今から約1300年前の奈良時代に、感染症による国難を迎えた時期がありました。

『続日本紀』によれば、天平7(735)年、大宰府管内で疫病が流行し多くの死者が出たことが記されています。死者の中には一般の農民も多かったようで、大宰府では管内(九州)の税の一部を免除するなどの対応がとられました。その2年後の天平9(737)年にも疫病が流行し、感染は九州だけにとどまらず、藤原氏の四兄弟(武智麻呂、房前、宇合、麻



国分寺の特徴的な建物として、七重塔が挙げられます。現地には、塔の巨大な心礎(芯柱を支える礎石)が残り、発掘調査の成果をもとに瓦積み地基壇が復原整備されています。この塔を10分の1サイズで復元した模型を、文化ふれあい館で屋外展示しています。(画像は模型を写真測量した3Dデータ)

呂)をはじめ中央の官僚たちも多数死亡するなど、一時的に日本の政治機能がまひするほどでした。

また、その当時日本を襲ったのは疫病だけではなく、以前から日照りによる不作、地震や台風といった自然災害にも見舞われていました。その頃に筑前国守であった山上憶良は、見聞きした庶民の苦しい生活のさまを歌に詠み、「貧窮問答歌」として『万葉集』に残されています。

こうした数々の災いに苦しむ国民を仏の加護によって救おうと、天平13(741)年、聖武天皇が「国分寺建立の詔」を発し、国ごとに国分寺と国

分尼寺を建てる事を命じたのでした。この命により、ここ筑前国においては、四王寺山の南西裾の好立地を選んで国分寺が建てられ、現在の「国分」という地名の由来となっています。

筑前国分寺跡は、大正11(1922)年10月12日に国の史跡に指定され、本年度1000年を迎えます。現

在、文化ふれあい館で開催中の通史展「まるごと太宰府歴史展2022」で特集展示していますので、ぜひ観覧してください。

文化財課

遠藤 茜



筑前国分寺の伽藍配置(建物の並び)

北から一直線に講堂、金堂、中門、南門が並び、金堂と中門をつなぐ長方形の回廊がめぐり、その内側の東側に推定で高さ50mを超える七重塔が建っていました。現在、金堂跡の部分には、江戸時代に再興された後継の筑前国分密寺が建っています。

※筑前国分寺跡国史跡指定100年を記念したイベントを10月6日(水)に開催します。  
くわしくは、文化ふれあい館のホームページで確認してください。

編集/太宰府市総務部経営企画課: 〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします!





# 太宰府の文化財

449

## 大宰府条坊跡第344次調査

本年4月～5月にかけて、五条1丁目地内で「大宰府条坊跡第344次調査」を行いました。

古代の遺跡「条坊跡」とは、正方位を向く土地を区画する道路によって基盤の目状に施工された古代の都市計画によってつくられたまちのあとをさします。



遺跡の全景(西から) 井戸



壊して捨てられた炉の破片

今回の調査では、古代の遺構は確認されず、中世の溝2条、井戸、柵を並べた柵列が見つかりました。溝2

条はほぼ南北方向に向いています。また柵列は、溝の東側に平行して見つかりました。井戸は調査区の西側にあり、直径4メートルほど周りを掘り下げ、中央に石組みの枠を作っ

ています。

溝は、ほぼ南北方向を向いていることや2条が平行して並ぶことから、道路や何らかの敷地の境界である可能性があり、中世太宰府の町並みと関係することが考えられます。

遺物としては、井戸から瀬戸美濃産の天目、溝から粉青沙器や象嵌青磁という15～16世紀の朝鮮半島の陶磁器、髪を結うことや刀を装飾する刀装具として使用された笄と呼ばれるかんざし、金属を溶かす炉の一部などが出土しています。これらの遺物は15～16世紀代に使用されたもので、この時期に営まれた遺跡であると分かりました。

特に注目したのは、鑄造のために使用された金属を溶かす炉の遺物です。16世紀に使用された溝の中から見つかりました。出土した状況から、壊して捨てられたことが分かりました。また銅が霰状になって固まったものなどが一緒に見つかったことから、銅を加工したと考えられます。

五条区には、かつて「六座」と呼ばれる商工業者集団がいました。「大

野城太宰府旧蹟全図北」には彼らの

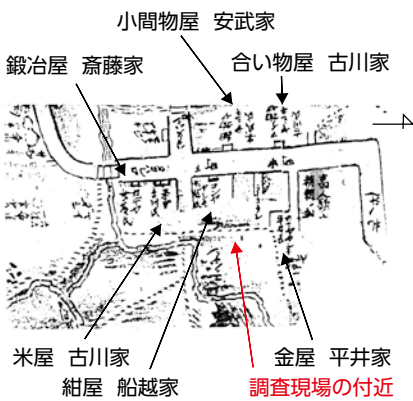
名が五条の道沿いに記載されており、「鍛冶屋 斎藤家」「米屋 古川家」「紺屋 船越家」「小間物屋 安武家」「合い物屋 古川家」「金屋 平井家」の6つの家を頭として、16世紀には

商工業者が集まっていました。六座の中の金屋 平井家が金属を溶かして加工する鑄造を行っており、今回見つかった炉の遺物と何らかの関係があると考えられます。

太宰府市内では15～16世紀の遺跡はあまり見つかっていません。今回発掘調査を行った場所は、当時の太宰府の様子を知るうえで重要な遺跡になると考えられます。

文化財課

福盛 雅久



『大野城太宰府旧蹟全図北』(個人蔵) 五条の部分

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198  
☎092(921)2121 FAX(921)1601

太宰府市観世音寺一丁目1番1号  
✉ keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

太宰府市公式SNSの  
フォローをお願いします！



# 太宰府の文化財

450

## 史跡指定1000年国分瓦窯跡

本年は国分寺跡とともに国分瓦窯跡が大正11(1922)年10月12日に国の史跡に指定されて1000年です。

国分瓦窯跡は国分4丁目に隣接する新池のほとりにあり、丘の斜面をレンガをアーチ状に組み上げてつくった登窯で、高さ1.5m、間口1.5m、奥行5.5mを測ります。指定



国史跡 国分瓦窯跡  
(中央奥の白い標柱の左側地下に保存された瓦窯跡があります)

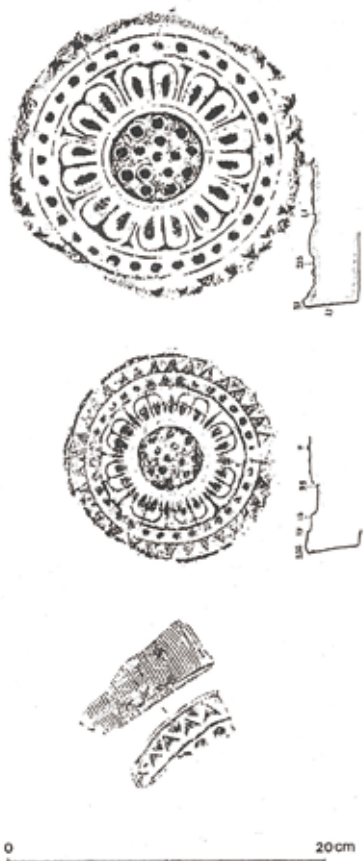


アーチ状に組まれた日干しレンガの窯の壁  
(「太宰府の文化財」太宰府町1968年より)

時点では農業用の池の斜面に2基の瓦窯が露出した状況で、池の満水時には窯の上のレベルまで水位が上がリ、窯の東側脇には池に注ぐ仕掛水路があったため農事のための池の給排水により窯が自然崩壊する状況であったようです。昭和2(1927)年度の工事により石垣の壁で水を受け、その内側で地面に露出した窯跡が見学できる形になっていました。その後、窯の風化や劣化が進んだため遺構を保護するために埋め戻され

ました。これまでの県や市による調査でこの場所での瓦窯は9基以上が並んであったことが指摘されています。このほか大宰府で複数の瓦窯があるのは都府楼北瓦窯跡で2基(平安時代)、来木(蔵司)瓦窯跡で9基(平安時代)、来木北瓦窯跡で2基(平安時代)、松倉瓦窯跡で3基(平安時代)、般若寺瓦窯跡で5基以上、国分松本8次調査で2基(奈良時代、平安時代)であり、国分瓦窯跡は大宰府の瓦窯としては最大級の規模であったといえます。

も主要な瓦生産施設であったといえます。国分寺の瓦もこの窯で焼かれた可能性がありますが、創業は国分寺より古く、製品の供給先としては大宰府政庁周辺の官衙(役所)や大宰府内の寺院などが考えられます。奈良時代の平城京の瓦は京域の北にあった奈良山丘陵など1km以上離れた場所で造られ、東北の多賀城跡では25km離れた北方の大崎平野というところで生産したものが運ばれて使用されています。これら他所との比較から、国分瓦窯は消費地に極めて近い場所に営まれた瓦窯だったこともわかります。



焼かれた瓦は奈良時代のはじめから平安時代までのもので、大宰府の瓦窯の中では最も長い間操業であったことが知られています。窯の数や操業期間から国分瓦窯跡は大宰府で

文化財課 山村 信榮

出土した奈良時代の軒瓦

(「筑前国分寺」鏡山猛『国分寺の研究』角田文衛編1928年より)

